

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2016.10) 平成27年度:43.

妊娠中期にある初産婦の自己効力感の低下要因に関する研究

相原 広美

第56回日本母性衛生学会総会・学術集会

利益相反の開示

発表者: 相原 広美

演題発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などは存在しません。

妊娠中期にある初産婦の自己効力感の低下要因に関する研究

旭川医科大学病院4階東周産母子センター

相原広美

研究背景

妊婦にとって、実の母親は、子育てに熟練していることがよくわかっていることから最も力強いモデルである(Rubin,R,1997)。

妊娠期の女性の自己効力感に影響を及ぼす要因として、初産婦と実母の関係性、夫婦関係、特性的自己効力感、母性理念との関連について焦点を当て、初産婦が母親役割を習得する過程の援助とする。

研究目的

初産婦の妊娠期における自己効力感の低下要因を明らかにする。

研究方法

調査期間: 2014年5月から9月

研究対象: 北海道の病院およびクリニックで妊婦健診を受診する妊娠中期(妊娠16~28週未満)のローリスクの初産婦。

調査方法: 無記名自記式質問紙とし、施設の担当者に依頼し配付、郵送法で回収。

調査項目および分析方法:

- (1) 妊婦の自己効力感
- (2) 初産婦と実母の関係性尺度
- (3) 夫婦関係満足尺度
- (4) 特性的自己効力感尺度
- (5) 母性理念質問紙
- (6) 属性(年齢、妊娠週数、婚姻状況、など)

計128項目とし、ロジスティック回帰分析を行った。

倫理的配慮: 本研究は、旭川医科大学倫理委員会の承認(Ne1744)を得て、規定に基づいて倫理的配慮を実施した。

結果

1. 回収状況

北海道内の産科病院およびクリニック17施設にて、667部を配付し、344名から回答を得た(回収率51.6%)。

属性および調査項目の5つの尺度に欠損値のあるケース、ハイリスク合併症のケースを除去した結果、分析対象は279名で有効回答率は41.8%であった。

2. 妊婦の自己効力感の二群分け

N=279		
項目		人数(%)
妊婦の自己効力感	高値群	147(52.7)
	低値群	132(47.3)

3-1. 対象の基本属性および状況

N=279		
項目		人数(%)
年齢	10歳代	2(0.7)
	20歳代	139(49.8)
	30歳代	133(47.7)
	40歳代	5(1.8)
	平均	29.9±4.46歳
妊娠週数	平均	22.5±3.70週
婚姻状況	既婚	273(97.8)
	未婚	6(2.2)
家族形態	核家族	265(95.0)
	拡大家族	14(5.0)
職業	有職	189(67.7)
	無職	90(32.3)
同胞	あり	260(93.2)
	なし	19(6.8)
定位家族での順位	第1子	111(39.8)
	第1子以外	168(60.2)

3-2. 対象の基本属性および状況

		N=279	
項目		人数	(%)
実母の有無	健在	279	(100)
	不在	0	(0.0)
実母の年代	40歳代	15	(5.4)
	50歳代	149	(53.4)
	60歳代	109	(39.1)
	70歳代	6	(2.2)
実母の職業	有職	234	(83.9)
	無職	45	(16.1)
妊娠中の実母のサポート	あり	253	(90.7)
	なし	26	(9.3)
妊娠中の夫のサポート	あり	274	(98.2)
	なし	5	(1.8)
里帰り分娩の予定	あり	121	(43.4)
	なし	158	(56.6)

4-1. 関連要因の妊婦の自己効力感の高値群と低値群の比較

		合計 n=279	高値群 n=147	低値群 n=132	P値*
年齢	1:18~34歳	231	123	108	0.682
	2:35~41歳	48	24	24	
婚姻状況	1:未婚	6	0	6	P<0.05
	2:既婚	273	147	126	
家族形態	1:核家族以外	14	6	8	0.45
	2:核家族	265	141	124	
職業	1:無職	90	53	37	0.152
	2:有職	189	94	95	
同胞の有無	1:いいえ	19	10	9	0.538
	2:はい	260	137	123	
定位家族での順位	1:第2子以上	168	86	82	0.538
	2:第1子	111	61	50	
実母年代	1:40歳代	15	8	7	0.784
	2:50~60歳代	258	135	123	
	3:70歳代	6	4	2	

*P値はPearsonの χ^2 検定による。

4-2. 関連要因の妊婦の自己効力感の高値群と低値群の比較

		合計 n=279	高値群 n=147	低値群 n=132	P値*
実母の職業	1:無職	45	28	17	0.162
	2:有職	234	119	115	
妊娠中の実母のサポート	1:なし	26	15	11	0.591
	2:あり	253	132	121	
妊娠中の夫のサポート	1:なし	5	0	5	P<0.05
	2:あり	274	147	127	
里帰り分娩	1:いいえ	158	83	75	0.952
	2:はい	121	64	57	
初妊婦と実母の関係性**			110±13.7	97±16.3	P<0.000
夫婦関係満足**			23±2.25	21±3.03	P<0.000
特性的自己効力感**			78±10.8	7±11	P<0.000
母性理念**			10±8.03	6±8.76	P<0.000
伝統的母親役割肯定項目			-4±3.40	-2±3.46	

*P値はPearsonの χ^2 検定による。

**平均値±標準偏差, P値はMann-WhitneyのU検定による。P<0.05

5. 妊婦の自己効力感を従属変数とした多変量解析の結果

	偏回帰係数	オッズ比	95%信頼区間		有意確率 (p)
			下限	上限	
			実母のサポートの有無	-1.38	
夫婦関係満足	0.173	1.189	1.056	1.339	0.004
実母に対する肯定感	0.134	1.144	1.017	1.286	0.025
実母からの自立性	0.143	1.153	1.007	1.321	0.039
妊娠期適応	0.307	1.360	1.189	1.554	0.000
特性的自己効力感	0.039	1.039	1.010	1.069	0.008

モデル χ^2 検定 p<0.01
判別的中率 77.1%

考察

母娘の関係性: 自己効力感の低い妊婦は、実母との関係性により、母親役割獲得に関して自信が持てないこと、自立していけないことが示唆された。

夫婦関係: 新婚期の発達課題である家族の中核をなす安定した夫婦関係が不満足であれば、妊婦自身が母親役割獲得を十分にできないことが示唆された。

特性的自己効力感: 日常生活で培った行動を起こす、行動を完了しようとする意志が十分に備わっていないければ、妊娠という課題に対して影響することが示唆された。



妊婦の自己効力感が低い人にこそ、妊娠期の変化に対応し、母親役割を獲得できるという自信に影響するこれらの要因を意識し、関わる必要があると考える。

結論

1. 初産婦の自己効力感を低下させる要因は、「実母をモデルとした妊娠期適応」、「実母からの自立性」、「実母に対する肯定感」、「特性的自己効力感」が低い、「夫婦関係が不満足」、「実母のサポートのない」であった。
2. 母娘の関係のうちの実母をモデルとした妊婦自身の妊娠の受容が最も影響を及ぼしていた。
3. 妊婦の自己効力感が低い人にこそ、妊娠期の変化に対応し、母親役割を獲得できるという自信に影響する要因を意識した関わりが必要といえる。